# 長谷川四郎全集　第十三巻

長谷川四郎全集第十三巻

一九七八年二月二〇日発行

著者長谷川四郎
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）
振替東京六-八二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀
©一九七八年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

# 長谷川四郎全集 第十三巻 晶文社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1
原住民の歌 9
猫の歌 13
白鳥の歌 13
花火の歌 14
たままつりの歌 15
海底の時計の歌 15
軍艦マーチの歌 16
ツノの歌 17
投資家の歌 18
航海者の歌 19
未確認戦死者の歌 20
あさのまがりかどの歌 20
たまひろいの歌 21
ぐるぐるまわりの歌 22

ロデオの歌　23
三人兄弟の岩の歌　23
手品師の歌　24
病人の歌　25
とうとうたらりの歌　26
石ころの歌　27
神々の歌　27
ジキタリスの歌　28
兵隊の歌　29
リボンの歌　31
番人の歌　31
ランプの歌　32
露営の夢の歌　33
うたごえの歌　35
パチンカマーチの歌　36
竹の子の歌　37
時刻の歌　38
兵隊女房の歌　39
ロバの歌　40

部分品の歌　41
よいとまけの歌　42
アロハオエの歌　43
パンの歌　44
さいのかわらの歌　45
余計の歌　46
本よむ人の歌　47
原住民の歌　48
むすびの歌　49
いろはうた　53
新日本文学会第十一回大会の歌　60
わがオリンピック　63
新日本文学会第十二回大会の歌　65
逃亡兵の歌　66
復員列車の終着駅の歌　66
おかし男の歌　67

『壺井繁治詩集』 71
オルフォイスに捧げるソネット 72
『伊東静雄詩集』 75
リルケ『オルフォイスに捧げるソネット』訳者序 77
短歌について 80
詩人の綱渡り 82
日本社会における詩人の運命 84
『現代フランス詩人集』第一冊 91
ギルヴィク 92
ロベール・デスノス 94
通りすがりの人に 95
エネがディドンに…… 96
訳詩集『海』自序・解説 99
新・椋鳥通信 105
ギルヴィク詩集『平和の味』あとがき 118
外国の詩と日本の現代詩 119
ミヌー・ドルーエ 122
ロルカの墓 125

タデウシ・ルージェヴィチ三章　127
現代ドイツの詩　130
ニコラス・ギリェン詩集『キューバの歌』訳者あとがき　132
石原吉郎詩集『サンチョ・パンサの帰郷』について　135
『さまざまな歌』あとがき　136
『小熊秀雄全詩集』　137
詩のたのしみ　139
三木卓詩集『東京午前三時』　157
『ロルカ詩集』あとがき　160
侃侃諤諤　167
俳句と詩　170
ロルカ　みずからの言語・大衆の言語　172
東海道一と筋も知らぬ人　176
ヨハネス・ボブロウスキ　178
詩人の言語　179
戦争のあとがき　188
反戦の詩　190
ロルカとスペイン内乱　203
ボリース・パステルナーク詩集『わが妹人生1917年夏』に寄せる



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈わが著書のための広告〉『原住民の歌』 217
バカは死ななきゃなおらない 217
訳詩集『風の神の琴』まえがき・あとがき 219
『ジプシー歌集』訳者序・詩人の血——訳者のノート 223
エドワード・リア『ノンセンスの贈物』 ジェームス・カーカップ『動物誌』 246
詩人の血 249

作者のノート・13 255

解題 福島紀幸 261

# 1

# 原住民の歌

## 猫の歌

のっそりきた猫が、少年の
いる借家に、ぬれ縁と小さな庭
ミルクわけて少年やった
ぶるんぶるんぶるんぶるん
ちょくちょくそれから猫きた
ぬれ縁でひなたぼっこ
ミルクわけて少年やった
夜なかに雨戸の、むこう
すのあすのあすのあすのあ
いびきたてて猫ねてた
朝にミルク、少年やった
ある日、猫こなかった
どうしたのかな、少年言った
もうそれっきり
のっそり猫、こなかった
七十年経過
少年は八十歳
べつの町、べつの借家
モルタルアパート
少年死んだ死ぬとき言った
あの猫、どうしたのかな

## 白鳥の歌

引力は一つしかない
白鳥はおぼれる
しずむしずむしずむ
みずにうつる
おのれのかげのみほし
白い点が青にきえ
あるはただ空と海と
だれがならした
白鳥の黒い手風琴？
さざなみのたつ
こともうなくて

## 花火の歌

花火よ花火
遠い花火
消えようとして
消えるまえに
ますます光り
ますます現われ
ドドンと一発
音はまだ
きこえてこない
消えようとして
消えるまえに
ますます光り
ますます現われ
音はまだ――
少しばかり
ぼくは生きた

## たままつりの歌

生ならば明るいの
死ならば、すばやいの
――オルゲの希望リスト

ふるえているふるえている
死人の顔の白いベール
あれはただの風である

地下にねむる人びとは
朝がきても目をさまさない

通りすがりにやまぶきの
花が咲いていたら
地下にねむる者を思うがいい

われらはべつべつの世界に住む
区別をはっきりさせろ

死人をとむらうために
死人を迎えるために

胸の鼓動がとまり
呼吸一つせず
脳波も出ない
だからといって
完全に死んだと断定するか

完全に死んではいるが
死の鮮度が高いと断定するか

あれは死んでいる黒人の女で
死にたてのほやほやだから
心臓をえぐり出していいか

死ぬときは
さっさと死ぬがいい
せいぜい
生きている人の
記憶にしばし生きるがいい

死人は無限に死んでいく

死なせるがいい
じゃまするな

なんにもいわないから
言葉がないと断定するか
だまっている言葉だから
きくにあたいするのだ

むかえ火をたき
おくり火をたく
にいぼとけの心臓で
生きようとは思わない

## 海底の時計の歌

山にのぼらぬ登山帽
鳥をうたないハンティング
夜っぴて網をひいたけど
なんにもかかっちゃこなかった



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com